

「習うより慣れろ」とはよく言ったもので、たとえば石原裕次郎（だいぶ古いが）などのデビュー当時の曲と晩年のヒット曲とを比べてみると、声の使い方、音程の正確さ、音域の幅、音色のパラエティー等々、あたかも別人が歌っているようである。

日本では好き嫌いにかかわらず小学校で半分無理やり歌わされる文部省唱歌のおかげで、箸にも棒にもかからないような重症音痴はあまりいないようである。呆れる程の音痴はかえって欧米に多い。

ところで、かく言う私も家の者にあきられる程のひどいオンチである。ウイーンにおられる音痴諸氏、ご安心あれ。

ピアノの歴史

十五世紀、ハプスブルグ家に神聖ローマ帝国の帝位が授けられた。それ以来十九世紀までの長い間、ウイーンはヨーロッパの中心として栄え続ける。政治や経済面での発展のみならず、芸術や文化、中でも特に音楽の中心としての重要な位置については、今ここで改めて述べる必要もないだろう。

「音楽の都」ウイーンを本拠地として活躍した音楽家達の名は、ハイドン、モーツァルトなどをはじめ挙げ出せばきりがながないが、その中でピアノという楽器はどのように発達してきたのだろうか。一口に楽器といっても、弦楽器、管楽器、打楽器その他いろいろあるが、すでに何世紀もの間使用されてきたこれらの楽器は、それぞれの時代の音楽家の要求を反映し、変化してきた。鍵盤楽器の代表ともいえるピアノも、その例外ではない。

今日では単に「ピアノ」と呼ばれているが、その昔には「フォルテピアノ」又は「ピアノフォルテ」という名称が広く用いられ、名前の示す通り（フォルテ＝強い、ピアノ＝弱い）指先の力の加減によって音量に強弱がつけられる事が、この楽器最大の特徴であった。ドイツ語では現代のピアノと区別するために、この十八世紀から十九世紀にかけて製造されたピアノの前身ともいえる楽器を「ハンマーフリーゲル」または「ハンマークラヴィア」と呼んでいる。一見チェンバロのような外見を持ち、鍵盤に向かった時の楽器の幅も、現代のピアノの三分の二ぐらいである。きゃしゃな、とてもその上に本を積み上げたり花瓶を飾ったりできるようなしるものではない。

この新しい楽器が出現する以前、一般に広く使用されていた鍵盤楽器といえば、パイプオルガン、チェンバロ、それにクラヴィコードと呼ばれる机上でも使える小型の楽器ぐらいなものであった。しかしパイプオルガンはあまりにも大きい。クラヴィコードはその音色こそ美しくとも、音域、音量共に満足できるものではない。音楽家仲間では合奏をしたりする時に一番愛用されたのは、やはりチェンバロであった。明るいきらびやかな音色を持ち、楽器も部屋の大きさと用途とに合わせて小ささまざまなものが作られた。大型のチェンバロでは各種のレバーやペダルなどの操作によって、何種類もの音色を選択する事が可能であった。

チェンバロは、アクションに取りつけられた鳥の羽根の根元の硬い部分で弦をはじく事によって音が出される。ちょうどギターを弾く時に指先にピックをつけるようなものだが、この羽根の代用品として、今日ではプラスチックが用いられるようになった。楽器最大の難点は——パイプオルガンもそうであるが——指先のタッチによる細かい強弱のニュアンスが出せない、という事であった。そこに登場した「フォルテピアノ」はすぐさま大きな反響を呼び、それまで全盛時代を誇っていたチェンバロを、比較的短時間のうちに凌駕するようになった。

尚、蛇足ではあるが「チェンバロ」と「クラヴサン」と「ハープシコード」は伊・仏・英、と言語が異なる

るだけで、みな同じ楽器を意味している。

「弦をはじくのではなく、ハンマーと呼ばれる小片で打弦することによって音を出す」ピアノのアクションがバルトロメオ・クリストフォリ（一六五五―一七三一）によって初めて考案されたのは十七世紀末、イタリアにおいてであった。その後このアクションが広く一般に浸透し、それに伴って楽器が発達しはじめたのは、十八世紀になってからである。

音楽家のたくさん集まる土地には優秀な楽器造りの職人も集まり、お互いの競争も刺激となって、ピアノは当初の形態からみるみる変貌していく。十八世紀当時、ウィーン、ロンドン、それにアウグスブルクなどが、ピアノ製造の盛んな都市であった。アクション機構はどんどん改良され、数々の新しいアイデアも試みられたが、基本的には常に「弦をハンマーで打って音を出す」楽器であった。打弦用のハンマーヘッドとしては当初、木片に柔らかい鹿皮を貼ったものが使用されていた。重さ数グラムの小さなもので、厚いフェルトを使用している現代のピアノのハンマーヘッドから生み出される音とはかなり異質な、歯切れの良い、どちらかと言えばチェンバロに近い音質がその特徴であった。

この新しい楽器への演奏家側からの要望は「より広い音域」と「より輝かしい音質」、それに「より大きな音量」であった。これらの要求に答えるために、ピアノはその外見も一層大きく、たくましくなっていく。五オクターヴ程しかなかった音域も、その後七オクターヴ以上にまで広がる。当初はほぼ木材のみで組み立てられていたが、その木材は次第に厚みを増し、補強材として鉄骨も使用されるようになった。鉄によって木枠や響板のねじれと反りを防いだところへもっと太い弦をより強い張力で張れば、大きな音が出るようになる。アクションもタッチが大分重くはなってしまったとはいえ、その分丈夫な物が作られるようになった。このようにいろいろな面で改良されても、ピアノはまだ比較的壊れやすい楽器であった。一八一一年に生まれたフランツ・リストは、その頃人知をはるかに超越したテクニクと華麗な音楽とで、世間に一大セン

セーションを巻き起こしていた。リストが一回の演奏会を行なうには平均三台のピアノが必要であったという。もっともこれはある程度ショーの一部でもあり、その時に切れた弦などは興奮した聴衆の格好なお土産となったようだ。

ピアノ製造も、手工業的なものから、より大がかりなものへと変貌していく。オーストリアのベーゼンドルファー社、ドイツのベヒシュタイン社やブリュートナー社、フランスのエラール社、イギリスのプロードウッド社やアメリカのスタインウェイ社その他数々の会社がそれぞれに特色のある楽器を生産し、ピアノ製造の世界にも近代化の波が押し寄せてきた。

鍵盤一オクターヴの幅が規格化されるようになったのも、この頃からである。それ以前には特にこれといった規格はなく、たとえばウィーン製とロンドン製の楽器とを比較してみると、大差はないにせよ後者の鍵盤の方が幅が広めにできていた。その土地に住んでいる人間の平均的体格を反映してのことだろうか。

現在ではドイツの規格を国際基準として一オクターヴ百六十五ミリと決まっているが、アメリカのものはメートル法とインチ法との換算の際に生じる誤差の影響によって（誰がどのようにこれほど大ざっぱな計算をしたのか定かでないが）数ミリその幅が狭くなっている。

鍵盤の数は黒白合わせて通常八十八鍵であるが、前述ベーゼンドルファー社では現在世界で一番大きい九十六鍵のピアノが製造されている。このピアノは幅が一メートル六十八センチ、長さ二メートル九十センチ、重さは何と五百二十六キログラム。ここ二百五十年程の間にピアノも随分成長したものだ。

今日に至るまでのたくさんの歴史的ピアノ、試作品、実験作品などを展示した博物館がウィーンのホーフブルグ宮殿内にある。一見の価値はあるだろう。